

ひょうご

—神と仏—

伝説紀行

くわばらくわばら欣勝寺
雷の子と和尚さん

伝説

くわばらくわばら欣勝寺
雷の子と和尚さん

紀行

「くわばらの里」から
武庫川左岸に沿って

- ・くわばらくわばら
- ・欣勝寺の雷井戸
- ・武庫川左岸に沿って
- ・青野ダムから永沢寺まで

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

くわばらくわばら欣勝寺 雷の子と和尚さん

むかしむかし、天の上で雷（かみなり）の親子が雨をふらせようと、太鼓（たいこ）をたたいておりました。子供の雷は大張り切りです。どんどこどんどこと太鼓をたたいては、いなづまをぴかぴかと光らせておりました。

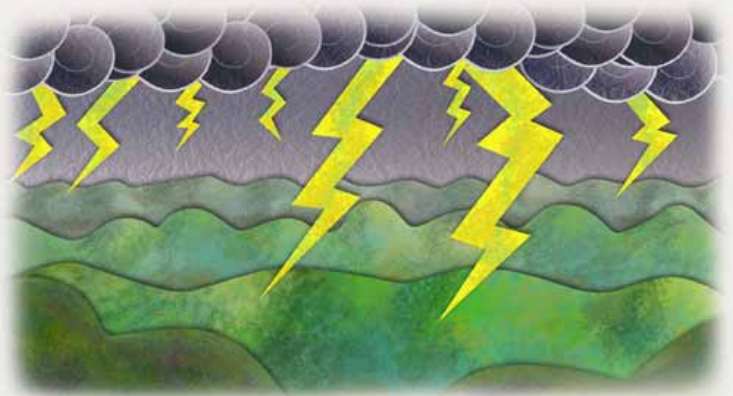
「こらこら、そんなにめちゃくちゃにたたいたら、危ないぞ」

雷の親はたしなめましたが、子供の雷は言うことを聞きません。

「それ、それっ」どんどこどんどこ。調子にのって太鼓をたたいては、あちらにざあざあ、こちらにざんざかと雨をふらせるありさまです。そうしているうち、張り切りすぎた雷の子は、雲の切れ目で足をすべらせて、人間の世界へまっ逆さまに落ちてしまいました。

雷の子は、桑原（くわばら）にある欣勝寺（きんしょうじ）の古井戸（ふるいど）に落ちこみました。ちょうどお勤めをしていた和尚（おしょう）さんは、ものすごい音をたてて落ちてきた雷にびっくりして、本堂から飛び出してきました。すると、井戸の底から「助けてー」という声が聞こえてきます。

和尚さんがのぞきこんでみると、井戸の底で雷の子が泣いています。あちこちに落ちては火事をおこしたり、人間のおへそを取ろうとしたり、悪さばかりする雷です。少しこらしめてやれ。そう思った和尚さんは、大きな木の板で、井戸にふたをしてしまいました。井戸の中は真っ暗です。



雷の子は泣きながら「助けてー。もう二度と悪さはしませんから」とさけんでいます。和尚さんは、しばらくの間知らんぷりをしていましたが、だんだんとかawaiiそうになってきました。それに、よく考えてみると、雷が雨をたっぷり降らせてくれるおかげで、お米もよく実るのです。

「こら、雷よ。これからはもう悪さはしないか」

「はい、もう二度と桑原村へは落ちませんから、助けて下さい」

「それなら、そこから出してやろう」

和尚さんはそう言うと、長いじゅうずを使って、雷の子を井戸からひっぱり出してやりました。雷の子は大喜びで、何度も何度も和尚さんにおじぎをしてから、雲の上へ帰ってゆきました。

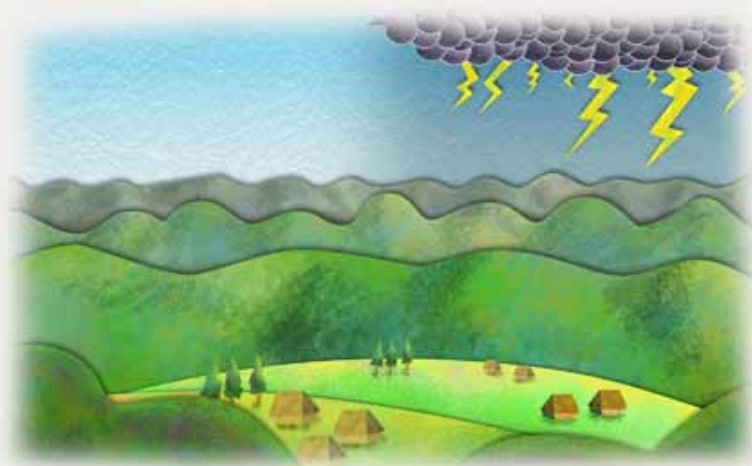
この話を聞いた雷の親は、ほかの雷たちを集めて言いました。

「これからは、三田(さんだ)の桑原村にだけは絶対に落ちてはならんぞ」

それからというもの、桑原村には二度と雷が落ちないようになったそうです。それを聞いたよその村の人たちは、雷が鳴り始めるとかやの中に入って、

「ここは桑原、欣勝寺。くわばら、くわばら欣勝寺」

と唱えるようになったということです。



くわばらくわばら欣勝寺 雷の子と和尚さん

おわり

紀行「くわばらの里」から武庫川左岸に沿って」

くわばらくわばら

伝説紀行で神様と仏様の伝説を取り上げるようになったとき、いろいろな本を読んでいて、まっ先に目についたのが、「くわばらくわばら」の話であった。この言葉を知らないわけではなかったが、今や日常で使うことなどほとんどない言葉である。落語か何かで聞いたような記憶もあるが、大体、「何かまずいことが起きそうなときに使うのかな」という程度で、具体的に何を意味するのかさえ知らなかったし、近畿ではなく、関東の方の言葉だと思っていた。

そういうわけで「くわばら」が、三田市（さんだし）の桑原だと知ったときには、ぜひその正体を確かめてみようと思ったのである。

欣勝寺の雷井戸



欣勝寺（門） 森に包まれた寺 欣勝寺（本堂）

欣勝寺（きんしょうじ）は、三田市南部、武庫川（むこがわ）左（東）岸の桑原にあって、国道176号線からは東に400mほど離れた緑の丘陵に包まれている。日当たりの良い丘陵のすそは、ひな壇のように水田が並んでいて、その間の細い道を上ると、欣勝寺の門が見える。急速に発展をとげている三田市の市街地と違い、周囲の雑木林と水田が、落ち着いた空気を保ってくれている。古い村のお寺、そういった雰囲気は今でも残っている。

雷井戸は、お寺の門を入ってすぐ左手にあった。地表から上は切石で縁取りされているが、地下にあたる部分は、人のこぶしの3倍から人の頭ほどの自然石が積まれた、直径1mに足りないほどの小さな井戸である。おそらく地上部分は、新しく作り直されたのだろう。水がずいぶんたまっていたので、井戸の深さまではわからなかった。

傍にはいわれを書いた看板が立てられ、雷井戸と刻まれた石碑の足元には、小さな雷の人形が、何だか物言いたげな顔ですわっていた。

桑原のあたりに、本当に雷が落ちないのかどうか、僕は知らない。もちろん調べようもないのだけれど、昔の人にとって雷は、正体がわからないだけに恐ろしく、その一方で、雨を恵んでくれる大切な存在でもあったのだろう。足を滑らせて雲から落ちこち、和尚さんにしかってもらうことで、桑原村だけには落ちないようになってもらいたい。このお話にはそういう願いがこめられていたのかもしれない。

というわけで「くわばらくわばら」は、正しくは「ここは桑原欣勝寺、ここは桑原欣勝寺」と唱えなければならぬのである。世の中にはいろんな雷があるから、落ちそうなときは是非使ってみていただきたい。もちろん、逆効果ということもあるということをお忘れなく。



雷井戸

雷井戸（切石の枠）

雷井戸（看板）



雷の子がいた

雷井戸（石碑）



鬼面瓦

欣勝寺（境内）

武庫川左岸に沿って



本殿への階段

さて三田市から武庫川に沿って下ると、武田尾（たけだお）付近の溪谷を経て大阪平野西部に出る。そこから河内国までは船ですぐ。大和国や山城国も遠くない。このような位置にあって、丹波や播磨（はりま）とも接する北摂・西摂（ほくせつ・せいせつ）の地には、史跡や文化財が少なくない。ニュータウンができて、ここ20年ほどで三田の町の姿は大きく変わったが、武庫川の左岸に沿って、歴史や伝説をめぐってみよう。

桑原から少し北西へ行った三輪には、三輪神社と三田焼の窯跡がある。



三輪神社（本殿）



三輪神社（本殿）



三輪



三輪神社（看板）

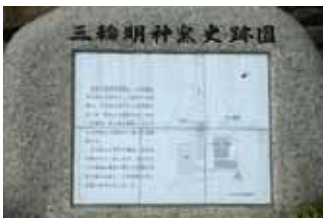
三輪神社は、三田市内のみならず北摂でも屈指の古社である。奈良時代に、大和国（現在の奈良県）の大神神社（おおみわじんじゃ）から分祀（ぶんし）されたと伝えられ、国造りの神様であり、人々の暮らしの守り神でもあるオオナムチノミコトが祭られている。

2005年に遷宮祭がおこなわれたということであるが、銅板で葺（ふ）かれた、木の色もまだ新しい社殿は、しかし十分な風格を感じさせてくれる。境内からは、ふもとの鳥居からまっすぐに続く参道と、その周囲に広がる旧市街の中心部が一望できる。この場所は、ちょうど三田盆地の入り口にもあたるから、古代から重要な場所として神が祭られたのかもしれない。

三輪神社から続く尾根には、江戸時代の後期に三田焼の窯が営まれた。2003年には窯跡が史跡公園として整備され、窯の大きさや内部構造を見学できるようになっている。ここで焼かれた染付磁器や青磁は、京都、大阪などにも出荷されていたという。



まっすぐに続く参道



三輪明神窯跡（石碑）



整備された窯跡



窯跡



窯の構造

公園内には小さいながら展示室があって、出土品の一部を見ることができるほか、陶芸体験もできるから、焼物に関心がある人にはお勧めである。

三輪神社から武庫川沿いに国道を5kmほど北上し、上井沢の交差点を右折すると、青野ダムに至る。

青野ダムから永沢寺まで



青野ダム記念館

青野ダムは、1988年に完成した多目的ダムである。武庫川の小さな支流であった青野川をせき止めてできたダム湖は、今は青々とした水をたたえて千丈寺湖（せんじょうじこ）と呼ばれている。この青野ダム建設にともなって、旧石器時代から中世にまで至る、集落跡、古墳、窯跡など、平地が少ない山間部としては、驚くほど数多くの遺跡が発掘調査された。ちなみにこの地域にある「末（すえ）」という地名は、須恵器（すえき）を焼いていた、その「スエ」が転じたものである。出土品の一部は、青野ダム記念館に展示されていて、考古学ファンにとっては必見である。

千丈寺湖は、また、ブラックバス釣りの名所である。週末になると、駐車場にはバスファンが車を連れ、湖の周囲は大いににぎわっている。それはそれで楽しい風景なのだけれど、ダムができる前を知っている僕にとっては少々残念でもある。以前は、谷筋の真ん中を細い青野川が流れ、周囲の山の斜面には小さな段々畑が作られて、ひなびた懐かしい山里の風景があった。夏の夜、顔の前の指先も見えないほど暗い川の縁に立つと、無数のゲンジボタルが乱舞していたものである。

千丈寺湖の東を回ると、湖の北端近くに末西の集落がある。ここの公会堂にお祭りされているのが「末の観音様」である。三田市の伝説の一つで、池の底に沈んでいた観音様を、それとは知らずに踏み台にして遊んでいた子供が腹痛をおこし、不思議に思った村人が、池の底をさらって引き揚げたものだという。また、観音様の中に金が隠されていると思った若者が、観音様を壊そうとして腹痛をおこしたとも伝えられている。



展示室



観音様



永沢寺（門）

一方で観音様は、どんなに日照りが続いても、この村には水があって田畑が良く実るように守ってくれているとも言われている。今では数軒の家が交代でお祭りを行っているとのことである。お願いして拝見させていただいたが、思っていたよりも大きく、高さが2m以上もある立派な観音様であった。きらびやかな伽藍（がらん）があるわけではないが、いつまでも村で守り続けてほしい仏様である。



門と池と仏様



仁王像

末の村からさらに谷奥へと進むと、母子の集落を抜け、永沢寺（ようたくじ）に至る。もう摂津と丹波の国境に近い、三田市最北端である。

永沢寺は、室町時代に細川氏によって創建された寺院で、通幻禅師（つうげんぜんじ）を開祖としている。現在の建物は江戸時代中ごろに再建されたもので、広い境内には本堂、開祖堂、書院などが設けられて、落ち着いた雰囲気をかもしだしている。



長い廊下

この通幻禅師という人が、まさしく伝説そのもののような人だということをご存じだろうか。まずその生誕なのだが、「飴（あめ）買い幽霊」というお話を知っている人も多いだろう。「赤ん坊を身ごもった若い母親が死んで、葬られた後に、墓の中で赤ん坊を産み落とす。乳をやれない母親は、幽霊になって夜ごと飴屋に飴を買いに来る」というあのお話である。実はその赤ん坊が通幻だったというのだ。

また、長じて高德の僧となった通幻を慕って、竜が女性に姿を変えて説教を聞きに通った後、通幻の教えによって苦しみから解放され、そのお礼にと身の鱗（うろこ）を1枚残していった。その鱗に水をかけて雨乞（あまご）いをすれば、どんなかんばつときでも雨が降るといふ伝説も伝えられている。

雷から観音様、飴買い幽霊から竜の鱗まで、近代的なニュータウンがどれほど広がっても、その周りには、まだたくさんの伝説が生き続けている。



永沢寺（本堂）



永沢寺（本堂）

用語解説

くわばらくわばら（くわばらくわばら）

落雷や災難、いやな事などを避けるために唱える言葉。桑畑には落雷しないという言い伝えによるものとされ、あるいは、菅原道真の領地であった和泉国桑原には、一度も落雷がなかったことによるともいわれる（ただし、和泉国の桑原に菅原道真の所領があったことを示す、正確な史料は存在しない）。三田市桑原と同様の伝説が、和泉国（現在の和泉市桑原町所在の西福寺）にもあるという。

三田市（さんだし）

兵庫県東部に所在する市。旧有馬郡北半部にあたり、江戸時代には三田藩として、九鬼氏が約240年間統治した。1958年より市制を施行。1980年代以降はニュータウン開発が進み、神戸、大阪のベッドタウンとして発展した。2007年11月現在の人口は、約113,600人である。

欣勝寺（きんしょうじ）

三田市桑原に所在する、曹洞宗（そうとうしゅう）の寺院。太宋山（たいそうざん）と号する。平安時代中期にあたる天禄年間（970～73）に、清和天皇（せいわてんのう）から分かれた源満仲（みなもとのみつなか）が開いたとされる。元は真言宗であったが、鎌倉時代、曹洞宗の開祖道元が桑原を訪れた際、この寺の山が宋の不老山に似ることから太宋山欣勝寺と命名し、以後、曹洞宗に改宗されたと伝える。

武庫川（むこがわ）

篠山盆地に源流をもち、三田盆地、武庫川渓谷を経て大阪湾に注ぐ河川。延長は約65km、流域面積は496平方キロメートル。主な支流には、青野川、有馬川、波豆川などがある。三田盆地より下流にあたる、宝塚市武田尾（たけだお）から西宮市生瀬（なまぜ）周辺では、深さ100～200mの渓谷を形成する。下流域は武庫平野とも呼ばれ、大阪平野の北西部を占める。河口付近は「武庫の浦」と呼ばれ、万葉集にもその地名が見える。

三輪神社（みわじんじゃ）

三田市三輪に所在する神社。大和国一宮である大神神社（おおみわじんじゃ：奈良県桜井市所在）から分祀（ぶんし：神を分けて祭ること）された神社で、オオナムチノミコト（大己貴神）を祭神とする。新抄掇略符抄（しんしょうきやくちよくふしょう：平安時代に成立した法制書）等によれば、天平神護元（765）年9月摂津の国に大和の大神神社の封戸（ふこ：社寺に所属して、租税や労役を納める民）を置いたという記述が見えることから、この時代にはすでに存在していたと考えられており、県下でも屈指の古社である。

用語解説

三田焼（さんだやき）

三田市内で、18世紀後半から昭和10（1935）年ごろまで生産された陶磁器の総称。寛政11（1799）年から大正初期まで続いた、三輪明神窯はその代表である。三田焼で最も著名なものは三田青磁（さんだせいじ）であるが、初期には、赤絵や染付などを生産していた。

文政7（1810）年には、京都から欣古堂亀祐（きんこどうかめすけ（1765～1837）：京都の陶工。三輪明神窯に招請されて特に青磁の制作を指導し、三田青磁の恩人と称えられる。後には、篠山市内で王子山焼の制作を指導した）を迎えて、青磁のほか、赤絵や染付磁器も多数生産されるようになり、三田焼は最盛期に至った。しかし、亀祐が去って以後はしだいに衰退した。明治に入り三田陶器会社が設立されて、一時復興をとげたが、昭和10年ごろに生産を終えた。

大神神社（おおみわじんじゃ）

奈良県桜井市にある神社。神社東方にある三輪山を神体として祭る。大和国一宮で、三輪明神とも呼ばれる。祭神は大物主神（おおものぬしのかみ）、大己貴神（おおなむちのかみ）、少彦名神（すくなひこなのかみ）。日本で最も古い神社の一つとされている。

遷宮（せんぐう）

神社において、本殿を建て替えて、神体・神霊を移すこと。遷座ともいう。定期的におこなわれるものを式年遷宮と呼び、伊勢神宮の場合は、20年に一度すべての社殿を建て替えて遷宮がおこなわれている。

染付（そめつけ）

素焼きした磁器の表面に、呉須（ごす：酸化コバルトを主成分として鉄・マンガン・ニッケルなどを含む鉱物質の顔料）で下絵付けを施し、その上に透明な釉（うわぐすり）をかけて焼いたもの。青または紫がかかった青に発色する。中国の元代に始まり、明代に隆盛。日本では江戸初期の伊万里焼に始まる。

磁器（じき）

やきもののうち、白色で透光性があり、硬く緻密（ちみつ）で吸水性がなく、叩（たた）くと金属的な音を発するもの。ただし磁器の概念は幅が広く、国によっても異なっており、中国においても陶器と磁器の区別は、日本と大きく異なっている。

青磁（せいじ）

青緑～緑色の釉（うわぐすり）を特徴とする磁器。白磁、黒釉磁（こくゆうじ）とともに、東アジア三大陶磁器とされる。

青野ダム（あおのだむ）

三田市末を流れる武庫川支流の青野川に、洪水調整、灌漑（かんがい）用水の確保などを目的として建設されたダム。1988年竣工。ダム湖は千丈寺湖（せんじょうじこ）と呼ばれる。総貯水量は1,510万立方メートル。

青野ダム建設範囲内では、ダム建設に伴って、後期旧石器時代から中世にわたる、集落、古墳、窯跡など、さまざまな種類の遺跡が発掘調査された。その一部は、現在、青野ダム記念館（三田市末字末野道東2189-1 三田市立青野ダム記念館 079-567-0590）で展示されている。

用語解説

ブラックバス（ぶらっくばす）

スズキ目サンフィッシュ科の淡水魚のうち、オオクチバス、コクチバスなどの総称。北米が原産で、日本には、1925年に移入された（箱根、芦ノ湖）。その後人為的放流が繰り返されたことで全国に広がったが、特に1980年代以降、ゲームフィッシングの対象魚として爆発的に広がり、兵庫県下でもほとんどの河川、ため池等で生息が確認されるまでに至っている。ブラックバスの放流によって、在来の魚類が激減するなどの影響が指摘されており、2004年に制定された「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」により、輸入放流などが禁止された。

ゲンジボタル（げんじぼたる）

甲虫目ホタル科に属する昆虫。成虫の体長は15mm前後で、腹部末端に発光器官をもつ。また、卵・幼虫も発光する。本州・四国・九州の、水質が良い河川に生息し、成虫は6月頃にあらわれる。水質の悪化や、河川の護岸がコンクリート化されたことによって激減していたが、現在は、各地で復活の試みがおこなわれている。

末の観音様（すえのかんのんさま）

三田市末に伝わる民話。戦乱によって観音像が池に投げ込まれ、それを知らない人が池に入って像を踏んだところ、腹痛をおこした。そこで池を干したところ、観音像が見つかったため、村でお祭りをするようになり、以降、村では常に田畑の実りも豊かであったと伝える。

伽藍・伽藍配置（がらん・がらんはいち）

伽藍とは寺院の建物のこと。伽藍配置とは、寺院における堂塔の配置で、時代や宗派により、一定の様式がある。

永沢寺（ようたくじ）

三田市に所在する、曹洞宗の寺院。青原山（せいげんざん）と号する。応安年間（14世紀後半）に、細川頼之（ほそかわよりゆき）が後円融天皇（ごえんゆうてんのう）の命により七堂伽藍を建立した。開祖は、通幻（つうげん）。以後細川氏の庇護を受けた。

釈迦如来、大日如来、阿弥陀如来の釈迦三尊を本尊とする。建物は、安永7（1778）年に再建された本堂、開祖堂、庫裡、接賓、書院などがある。

室町時代（むろまちじだい）

足利尊氏（あしかがたかうじ）が建武式目（けんむしきもく）を制定した1336年、または征夷大將軍に任ぜられた1338年から、織田信長（おだのぶなが）によって、足利義昭（あしかがよしあき）が京から追放された1573年までの、約240年間。1467年の応仁の乱以降は、戦国時代とも呼ばれる。

細川氏（ほそかわし）

清和源氏（せいわけんじ）の流れをひく、足利氏の支族。足利義季（あしかがよしすえ）が三河国細川村に住み、細川姓を名乗ったことに始まる。足利尊氏（あしかがたかうじ）の挙兵に従ったことから、室町幕府の管領（かんれい：室町幕府で將軍を補佐した最高職）として、讃岐・阿波・河内・和泉などを領国として勢威をふるった。

応仁の乱後は衰退したが、織田氏、豊臣氏に仕えた後、関ヶ原の戦いでは徳川氏に属し、江戸時代には肥後熊本54万石を領する有力外様大名となった。

用語解説

通幻(つうげん)

室町時代、曹洞宗の僧(1322~91)。豊後国(大分県)に生まれ、長じて能登国(石川県)総持寺に入った。細川頼之(ほそかわよりゆき)により建立された、永沢寺の開山として迎えられ、丹波地域に教えを広めた。後、総持寺住職。

通幻の禅は極めて峻烈で、試問に答えられない者を、境内に掘った穴へ投げ込んだと伝えられる。門下には、「通幻十哲」と称される優れた禅僧があって、通幻の教えを広めた。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	兵庫の民話	1960	宮崎修二郎・徳山静子	未来社
	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
	くわばらくわばら欣勝寺(紙芝居本)	2004	三田の民話・紙芝居編集委員会編	三田市教育委員会
	三田の民話100選(上)	2007	新編「三田の民話」編集委員会	三田市教育委員会
歴史・文化	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫のふるさと散歩1 神戸・阪神・三田編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	角川日本陶磁大辞典	2002	矢部良明ほか編	角川書店
	青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)	1988	兵庫県教育委員会	兵庫県教育委員会
その他	わがまちさんだ遊ingマップ	不詳	三田市教育委員会	三田市教育委員会
	三田市三輪明神窯史跡園	不詳	三田市三輪明神窯史跡園	三田市三輪明神窯史跡園
	さんだ みんなわまっぷ(見学者用パンフレット)	1995	三田市・三田市教育委員会	三田市・三田市教育委員会
	原色日本甲虫図鑑	1985	黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之	保育社

所在地リスト



欣勝寺	三田市桑原866
三輪神社	三田市三輪3-5-1
三輪明神窯跡	三田市三輪字宮ノ越858-1
末西公会堂	三田市末369
永沢寺	三田市永沢寺210
青野ダム記念館	三田市末字末野道東2189-1

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
 〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日